

## 七、木造弘法大師坐像

江戸時代

東浄寺 大字川上字薄久保

像高 二四・〇cm

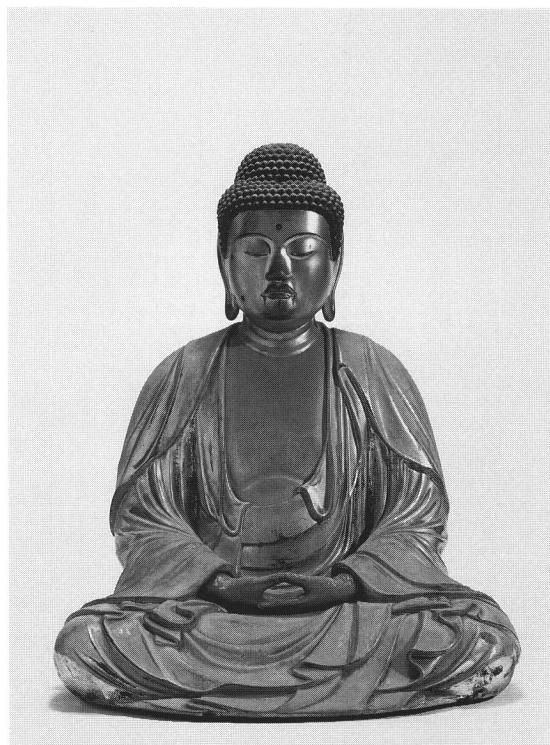
寄木造 玉眼嵌入 彩色

真言宗を開いた、弘法大師空海の肖像である。真言宗の寺院には、しばしば安置される。左肩より袈裟をかける。現在、両手首より先を欠失しているが、当初は左手に数珠、右手に金剛杵をとっていたものと考えられる。

構造は頭部を首柄まで一材で彫出し、襟の線で体軀に挿し込む。そして頭頂より両



木造弘法大師坐像



木造釈迦如来坐像

頬を通る線で面部を矧ぎ、目に玉眼をはめ込むが、両玉眼は欠失する。体軀は前後に二材を矧ぎ、さらに両肩先を通る線で体側に各一材を矧ぐ。脚部は、横に一材を矧ぐ。定型化した作風の像である。しかしこの像には、像内の空洞部に文書が納められている。この文書によって、この像の造立の経緯が知られるのである。この像は、棚倉領八樹村（現棚倉町八槻）出身で江戸に住んでいた玉屋庄兵衛という人が、諸天、父母などの恩に報いるために、享保十九年（一七三四）に造立し、郷里の寺院に納めたものである。玉屋庄兵衛の出身地は八槻村で

## 八、木造釈迦如来坐像

江戸時代

賢瑞院 大字川上字寺下

像高 六七・三cm

寄木造 玉眼嵌入 漆箔

当寺の本堂本尊である。すでに形式化し、表現に固さがみられるが、螺髪を一粒一粒刻むなど、丁寧につくられている。左肩を